

平成 29 年度 第 4 回 観察会 記録

日 時	平成 29 年 7 月 24 日 (月) ~ 26 日 (水)
観察地	加賀海岸 (塩屋海岸、鹿島の森、上木海岸)、湖北小学校ビオトープ、片野鴨池、外
講 師	大幸 甚 NPO 法人加賀海岸の森と海を育てる会 会長 (各観察地での講師は後述)
テーマ	加賀海岸の緑化と文化
備 考	参加者 38 名 (田中克先生、スタッフ藤田、藤原含む) 記録 飯田正恒

はじめに

本年 5 月 27 日、大幸 甚先生に「加賀海岸緑化の普遍的価値―世界遺産を目指して」と題する講演をしていただいたき、その内容への理解を深める目的で今回加賀市を訪れその現場を観察した。2泊3日の観察会は大幸先生のご尽力により、加賀市をあげてのご協力をいただいたお陰で、学ぶべきことが多く、参加者に変好好評で有意義な観察会になりました。

1. 7 月 24 日 (月) 曇り

(1) 塩屋海岸

大幸 甚先生、加賀市職員の北口陽治さん、谷口公一さんと合流。3 日間つきっきりでお世話いただいた。



大幸 甚先生



北口陽治さん



谷口公一さん

大幸先生から塩屋海岸の防砂の歴史と植生の説明

- 1) このあたりでは冬に強い季節風が吹き、江戸時代には一晩で 4.5m も砂が積もった記録があり、現在でもかなり多くの砂が積もる。石川県で開催された全国植樹祭に天皇・皇后両陛下をこの海岸にお迎えした記念碑 (高さ約 1.5m) がすっぽり埋まってしまい、春になると重機を使用し掘り出すという。
- 2) 塩屋海岸は越前加賀海岸国定公園 (延長 16.5km) の一部で、塩屋から片野にかけて全長約 4.3km、幅約 1km、白い砂浜が続く。
- 3) 現在、砂浜に沿って青々とした広大な黒松の海岸林が広がっている。この松林の造林には、冬に北西の季節風によって飛ばされる大量の砂 (飛砂) と人びととの戦いの歴史がある。
 - ① 江戸時代中期までこの辺りにひのき林があった。塩屋と片野の中間の沿岸部に中浜村という集落があったが木の伐採によって、飛砂が年々激しくなり、晩秋から初冬にかけての暴風による飛砂で地形が夕方には変わり果てることもあった。
 - ② 塩屋・上木一帯は、江戸末期には一木一草も見ることができない砂丘になり、田んぼや畑、家屋が砂によって埋没し、ついに中浜村は廃村になった。
 - ③ 大聖寺川河床に砂がたまり、上流部の水害の危険性が高まった。そこで当時の大聖寺藩は松の植林に力を注ぐも、明治の初めまでは荒涼とした砂漠状態が続いた。

- ④ 現在、塩屋海岸に見られる海浜植物は江戸時代に松林を作るための下草として、北前船の乗組員が全国各地から持ってきて植えたもの。(花満開のハマゴウが大群落をなし、アメリカネナシカズラ、カラヨモギなどが見られた)
- ⑤ 海岸の防砂と植林の国家事業が本格化したのは明治 44 年からで、営林署が中心になって少しずつ海岸部に松林が広げられた。現在加賀海岸の松林は長さ 4k m、幅 500~1200m、面積 330 h a の広大な面積になっているが、現在の姿になるまでには多くの人びとの血のにじむ努力があった。
- 4) 長い年月をかけ、自然の力を人が上手に利用することから生まれた、生物多様性に富む新しい自然度の高い生態系を世界自然遺産として後世に残したいと願っている。

(2) 鹿島の森

鹿島の森でアカテガニの営巣地を見る。また森の裾にある小さな池で脱皮するとのことで、これらを大幸先生の案内で見学。

この森は、北側は大聖寺川河口に、南西側は福井県の北潟湖に臨む陸地続きの小島で、標高 30 m、周囲 600 m で総面積は約 3 ha。古くは天台宗の霊場として、また江戸時代は大聖寺初代藩主前田利治が法華宗の道場として使ったため、鹿島の森(社叢)は数百年斧を入れることがなかったという。タブ・スダジイ・ヤブニツケイなどの常緑広葉樹林がおおい、樹下にはカラタチバナ・ベニシダ・ムラサキシキブなどが自生し、動物ではツルガマイマイ・アカテガニなどが生息し、加賀における唯一の暖地性植物による原生林である。



鹿島の森 (吉崎御坊跡から)



アカテガニ



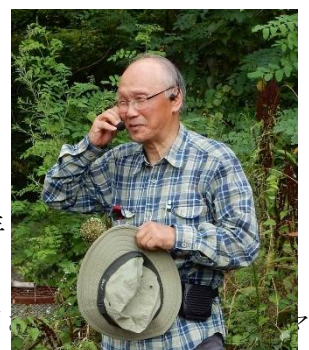
加賀ケーブル TV の取材

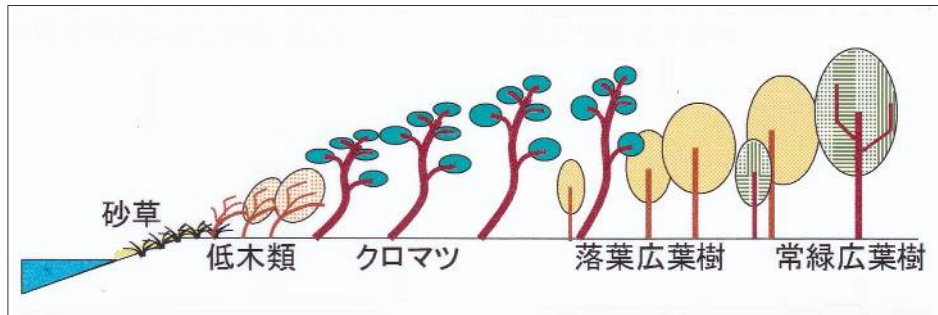
(3) 上木海岸 (松植林地帯、海浜植物群落地域) 観察

金沢大学・本多郁夫教授 (右写真) に松植林地帯のこと、海浜植物について説明をいただいた。

1) マツ植林地帯について

- ① 加賀市砂浜国有林で明治 45 年からクロマツの植栽が行なわれ、昭和 30 年代まで白砂青松の海岸林が多く見られ、松茸が多くとれた。
- ② 昭和 30 年代の燃料革命により家庭燃料がガスや電気になり、落ち葉が利用。マツ林は肥沃になり、広葉樹が侵入し始めた。またマツクイムシ被害により、多くのクロマツ林は枯れてしまった。
- ③ その後、クロマツが生育しやすい環境 (適当な植栽密度、列状間伐、落ち葉掻きで富栄養化を防ぎ、菌根菌の増殖しやすい環境を整える、マツクイムシ対策など) を整備し現在の海岸林ができた。
- ④ 海に近いほど植物にとって環境は厳しくなり、生育できる植物は限定されるが、海岸林を造成すると陸側では次第に環境がよくなり、陸側の植物は海側の植物に守られていろいろな植物が生育出来るようになり、植物の高さは陸側ほど高くなってくる。





2) 海浜植物

ハマゴウ、イソスミレ、アメリカネナシカズラ、ウンラン、ハマボウフウ、カモノハシ、カワラヨモギ、ネコノシタ、ハマヒルガオなどについて解説していただいた。



ハマゴウ



イソスミレ



アメリカネナシカズラ



ハマボウフウ (果実)

(4) 鹿島の森でアカテガニの幼生放出観察

現地での観察の前にバス車中で、石川県立大学・柳井清治教授 (右写真) に幼生放出の説明をしていただいた。

1) 生態

春から夏にかけて交尾の終わったメスは産卵し、0.5mm 足らずの小さな卵を腹脚にたくさん抱え孵化するまで保護する。やがて胚発生が進んだ卵は黒褐色になり、中に小さな黒い複眼が見えるようになる。黒褐色の卵を抱卵したメスは海岸に多数集まってくる。

7-8月の大潮(満月か新月)の夜、満潮の時間に合わせてメスが海岸に集合する。メスが体の半分くらいまで海水に浸かって体を細かく震わせ、腹部を開閉させると同時に卵の殻が破れてゾエア幼生が海中へ飛び出す。煙のように泳ぎだした無数のゾエア幼生は引き潮に乗って海へと旅立つ。ゾエア幼生は体長 2mm 足らずで、頭胸部が大きいエビのような形をしている。海中を浮遊するプランクトン生活期には植物プランクトンなどを摂食しながら成長するが、大部分は魚などに食べられてしまい、生き残るのはごくわずかである。ゾエア幼生は 3-4 週間の浮遊生活の間に 5 度の脱皮を経るとメガロパ幼生という形態に変態する。メガロパ幼生は脚が長くなってカニらしくなり、海底を歩くことができる。メガロパ幼生は 10 月頃に沿岸部に近づき、甲幅 4mm ほどの小ガニへ変態を終えた個体から上陸する。



2) 観察

3 班に分れて観察。この日は降雨があり放出の条件がよくなかったのか、アカテガニの個体数が少なく、水中で放出したのは 2 匹のみであった。(右写真は放出の瞬間を WEB から)



2. 7月25日（火）雨のち曇り

（1）湖北小学校ビオトープ（右写真、橋の上で説明中の大幸先生）

柴山潟の形を模し、校庭に沸く地下水を導入して作られたビオトープは、児童の自然観察や環境教育に貢献大とのこと。岸边にはアメリカフウ、ヒメガマなど多くの植物が見られた。



（2）片野鴨池

鴨池の面積は 10ha と小さいが、マガン、ヒシクイ、多数のカモ類など水鳥中心の豊かな生態系が残っており、人と自然の共存が続いていることから、湿地を守るための国際条約「ラムサール条約」に登録された世界的にも重要な湿地とされており、地元の人たちも大切にしてきた池という。今回見ることが出来た野鳥はダイサギ、アオサギくらいであったが、冬鳥が来ころ再訪し、鴨池の賑わいを実感したいと思う。



鴨池観察館から見る鴨池

（3）坂網猟（池田豊隆氏：大聖寺捕鴨猟区協同組合長）

江戸時代から続く伝統的な投げ網猟で、冬の夕方鴨池を取り囲む丘の上で網をもってカモを待ち、頭上を通過する一瞬を狙って網を真上に投げカモを捕らえる。この猟法は、カモとの智恵比べであり、決して過剰に捕獲することなく、生態系を維持しながら加賀地方の食文化を守り、また鴨池の管理、監視活動も兼ねていることなど、池田さんのお話は実に興味深いものであった。この後、坂網猟訓練場で西野公宏さんの指導で、希望者による坂網を投げる体験をした。（上写真左：坂網猟を説明する池田さん、右：坂網の投げ方を説明する西野さん）



（4）加賀橋立て船主集落

加賀市の橋立て地区には江戸時代後半から明治時代にかけて活躍した北前船の船主達の屋敷が多くあり、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定され、酒谷長兵衛家は「北前船の里資料館」として公開されている。加賀橋立てまちなみ保存会ガイドの案内で、2班に分れて見学した。（右写真：加賀橋立ての町並み見学中）

加賀橋立ては、近世前半までは茅葺民家が建ち並ぶ半農半漁の集落であったが、18世紀半ばから北前船の船主となるものがあられ、寛政八年（1796）には船主 34 名と船頭八名が確認でき、次第に船主や船頭、船乗りなど北前船にかかわる人々が居住する集落へと発展し、日本海を舞台に当時の物流の大動脈を担った。北前船船主は有名な金沢の銭屋五兵衛だけでなく、多くの船主が加賀や北陸一帯に多くいたことを知り、加賀市はじめ石川の歴史の厚みを感じた。



(5) 石川県九谷焼き美術館



九谷焼きを歴史的に見ると「青手」と称する青色を基調とした作品群にはじまり、「九谷五彩」といわれる赤、緑、紫、紺青、黄で山水、花鳥風月を表現したもの、また、「赤絵金襴」といわれる作品群を学芸員の解説で観賞したが、いずれも名品だけあって、素人ながら素晴らしいものであることが理解できた。一方、伝統的な作風にとらわれず、現代的センスでも作陶されている。面白いと思ったのは、加賀市の小学生と台湾・台南市の小学生から原画を募集し、秀作を絵皿にして展示していた。大幸先生が市長時代に始め、姉妹都市の台湾・台南市の子ども達にも呼びかけとのこと。多くの原画が応募されていた。大人には思いもつかない面白い発想の作品が多く寄せられており、楽しい展示であった。(上写真は、第14回小学生イラスト原画 九谷焼絵皿展で加賀市長賞に輝いた錦東小・6年表 煌大君の作品。絵皿になって展示)

(6) 夕食

片野海岸浜茶屋でバーベキューの予定であったが、雨天のため土山ブドウ園に変更。4班に分れ、市職員に参加してもらい、賑やかに歓談しながら、おいしい肉や野菜、ブドウをいただいた。

3. 7月26日(水) 快晴

昨日と異なり快晴。平家物語に登場する悲劇の武将・斉藤別当実盛の首洗い池と実盛塚を見学。その前に大幸先生お勧めのはちみつ工房「森のくまさん」に立ち寄る。購入者多数。

(1) 実盛首洗い池、実盛塚

悲劇の武将の逸話を大幸先生から聞き見学した。首洗い池の畔に、芭蕉が奥の細道で詠んだ「むざんやな兜の下のキリギリス」の句碑あり。実盛塚の松は樹齢数百年と思われ、枝ぶりも見事なもの。この地区の人びとの手で大切に保存されているようであった。



(2) (株) 丸八製茶場で、加賀ブランド「加賀棒茶」を体験

社屋に芳醇な茶の香りが立ちこめる中、代表取締役丸谷誠一郎氏(右写真)から「加賀棒茶」のものがたりをお聞きした。曰く、

“昭和58年に石川県で全国植樹祭が行なわれた際、天皇・皇后両陛下宿泊先ホテルから最高級のほうじ茶をとの要求に応じて作った「献上加賀棒茶」を昭和天皇み気にいっていただき、加賀棒茶の誕生となった。これを機会に、茶の生産者としての責任と使命を考え直し、地元に関わり込む企業でありたいと金沢市ひがし茶屋街に日本茶専門店「一笑」を開店し、広報紙「動橋」を発刊するなど、加賀棒茶を加賀ブランドとして確立を目指し、日々努力を続けている”とのこと。棒茶とお菓子をいただき、そのおいしさを実感。なお、この「加賀棒茶」をお土産に大幸先生から全員にいただきました。ありがとうございました。



(3) 吉崎御坊東別院および国指定史跡吉崎御坊跡

東別院（真宗大谷派）本堂で住職のお話を聞き、次いで吉崎語り部の会の山本さん、板谷さんの案内で史跡吉崎御坊跡を拝観した。吉崎御坊とは浄土真宗中興の祖、本願寺八世蓮如上人が比叡山などの迫害から京から逃れてこの地で布教活動を行ない、多くの坊舎が作られた。しかし文明 6 年（1474 年）3 月 28 日、火災で焼失する。その後再建したが再び文明 7 年（1475 年）8 月 21 日、戦国の動乱で焼失、蓮如は吉崎を退去した。永正 3 年（1506 年）、朝倉氏が加賀より越前に侵攻した加賀一向一揆勢を九頭竜川の戦いで退けた後、吉崎の坊舎を破却し、以後廃坊となり、現在吉崎御坊跡として国指定史跡。現在東・西本願寺がそれぞれの管理区域をもち、管理しているとのこと。蓮如にまつわる多くのエピソードを説明していただいた。最後に西別院（真宗本願寺派）にお参りして、全ての予定が終了した。写真は高村光雲が昭和 9 年（1934）に製作した蓮如上人像。



大幸先生、加賀市職員の方々とここで分れ、大阪へ向け出発したが充実した 3 日間でした。大幸先生はじめ、北口様、谷口様および加賀市をあげてのおもてなしに感謝申し上げます。なお、この 3 日間の写真記録を中垣尚治さんが「加賀の旅日記」としてまとめていただきました。ホームページの「投稿作品」のページに収載しています。併せて閲覧ください。

スタッフ 藤田 益栄
藤原 雄平

--